



日替わり
メイン
メニュー

川崎ゆきお

「何をどうしていいものか、最近分からなくなりましたなあ」

「それは困ったことですねえ」

「まあ、特に何をやるというわけじゃないので、困りはしないのですが、やはりメインが欲しいですなあ」

「メインですか」

「階層の一番上です」

「ルートディレクトリーですね」

「ルート、ああ、国道一号線のようなものですよ」

「それが、メイン通りなのですね」

「そうそう、しかし、どうしたことか、その一号線がなくなりましたねえ。二号線でも三号線でもいいんですがね」

「メインというのは、やるべき目的のようなものですか」

「ああ、そうです。やっていることは細かいことでも、それらは本流に繋がっているのですよ。町内規模であっても、世界規模になる。それほど大きな流れの一環内にいるわけです。いや、いたのかなあ。以前は」

「今は、違うと」

「それが何か分解されたようになりましてねえ。国道に出ないのです」

「確かに大昔はありましたねえ。国のためとか、一族のためとか」

「それに近いです。そういう縁ではないですが、共有するものがありました」

「共通の価値観ですね」

「そうです。だから、それさえやっていけば、誉められたり、尊敬されたりもしたものです。だからやる気も出来た。小さなことでもね。そこと繋がっているんだから、いつかは認められるとね」

「最近、それがなくなったと」

「最初からなかったのかもかもしれませんなあ。錯覚だったのか。まあ、そういう目的のようなものが消えましたなあ。だから、国道に出ても仕方がないし、第一、もうないので、町内の道をうろうろしているような次第です。これは国道に繋がってこそ意味がある。しかし、交通機関はそれだけじゃない。それに私、車の運転をやめましてねえ。もう国道や高速道路に出ることもなくなりました」

「はい」

「それに近所に新幹線が走ってましてなあ。飛行場も近い。もうこれだけでもばらけたのでしょあうなあ」

「結局、どういうことでしょうか」

「メインのようなものがなくなったんじゃないかと、思うのです。それでやるネタがなくなったので、退屈で退屈で」

「じゃ、ご自身のことをやられればいいじゃないですか」

「自分の為ねえ。これが曲者でねえ。何が自分の為なのかが分からない。人の為なら、勝手な思

惑を抱けるのですが、自分自身になると、何が大切で、何が大事で、何をやるべきかが曖昧になる。まずは、ここから見ないといけません」

「はい」

「そうになると、若い頃やっていた自分探しの旅になる。これは避けたい。何もなかったことが分かるだけなのでね。旅しない方がいい」

「では、自分で適当にメインをこしらえればどうですか」

「やりましたとも」

「はいはい」

「しかしねえ、コロコロと変わるのですよ。何せ自分で決めるわけですからね、簡単に換えられる。で、最近是人に言わないようにしています。私は、こうするって宣言をね」

「それで、どうなるのですか」

「メインですよ、メイン」

「はい、そのメインはどうなるのです」

「全部横並びにし、カオス状態にする」

「はあ、つまり、ルートディレクトリに、すべてのファイルを裸のままぶち込むようなものですね」

「はい、それで、適当につまみ食いするような感じで、メインも日替わりなのです」

「日替わりメインメニューですネ」

「そこで、戦わせるのですよ。生き残ったもの勝ちです」

「長く続いたものが勝ちと」

「はい、勝ち価値に通じる」

「はいはい、通してください」

「勝ち抜き戦でしてね。これは結構いけますよ」

「ゲームの理論ですネ」

「あ、そうなんだ」

「よく分かりませんが、ゲーム感覚というやつでしょ。解き放して、自然な振る舞いに任せる」

「そんな難しい話じゃないのですよ。メインではなかったものが、メインに躍り出るのが面白くてねえ」

「はい、楽しめる間は、楽しんでください」

「はい」

了